



婦人と子ども

第四卷第十號

お隆さんの手柄

林天然

少女お隆さんは、陸軍大尉國野爲也の長女であります。今年十歳で、尋常四年級になりました。十歳にしては、躰が大きく、色白く鼻隆く、眼涼しくて、な

かく品のよい綺麗な少女であります。其上、天性剛發で如何にも活潑でありまして、勢のよいことは、父親にも優つて居る位、爪もあげれば輪も廻はし、投毬もすれば繩飛びもする、甚しきは樹に攀登つて果實をもぎ、竹馬に乗つて駢競もする。爲らないのは、相撲をとることと、水の中で泳ぐことだけである。でまた普通の女の兒のする人形遊びや、飯こつこなどは、極く嫌らしい。といつて男の子のよゝに亂暴などは決して爲ない。ちよつと見ると、餘り元氣がよいから、輕卒よゝであるが、よく道理を辨へて學校の方は精出して學びますから、いつも一番か二番三番と下つた例はない、平生他の女兒のよゝに、ペチヤクチャ饒舌らないが、いざといふ時には、立板に水の如く論じたてる。それから力

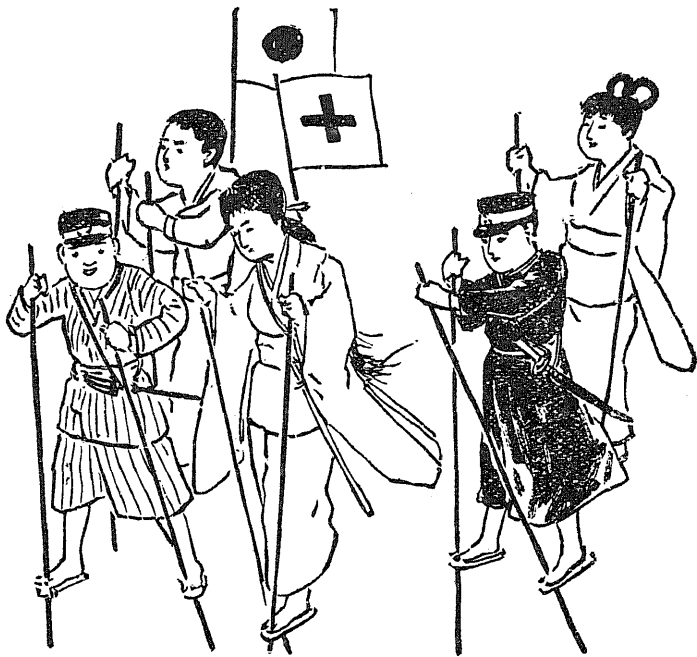
も強く、ある時男の生徒が女の生徒を虐めたといふので、運動場で男の生徒三人を取って投げたので、其大力を知らない者はない位であります。

日露戦争が始まると、父の大尉は直ぐ出征の途に上ることになりました。お隆さんは惜げる所か、健げにも父に對ひ「お父さん、露西亞は日本の仇敵ですねえ、ほんとに憎いわ、大きな國をかさにきつて、意地のわるいことばかりして。お父さん！ シツカリやって下さいいな。お父さんのお名前は、國野爲也といふじゃありませんか、國の爲めなら、お父さんが戦死なすつても、妾泣きはしないの、ねえお父さん！ 露西亞の兵隊を逐ひまくって下さいな」といひましたから、大尉は大喜び「オーお前、よく言ふてくれた。

俺はキット露西亞の兵隊を逐ひまくって見せる』といつて、勇みながら營所に赴きました。

お隆さんは、それから毎日、戦争遊ばかりして居ります。で戦争のことをば、少女に珍らしい程よく知ってる。やれ聯隊旗だの、やれ要塞司令官だの、やれ有阪砲だの、恤兵部だの、哨兵線だの、赤十字社だのと、口癖のよゝに言ってる。而かも器用であつて、旗を彩つたり、軍艦の形を切つたり、鐵砲を製えたりする。けれども有繫に女の兒だけで、帽子はかぶらない、旗も多くは赤十字の旗をもつてゐるのです。

或日お隆さんは、劍をさげ旗をたて、二三人の少女を連れて、予の宅え遊びに來ました、予は平常お隆さんをば妹のよゝにして



なるから、いつも揃拵ってやる。

「お隆さん！ 豪らいねえ。どー

れ、お見せ其刀を、オーこれ

はよい刀だ、大將の持つ刀の

よーだ。

「兄さん！ 今日の新新聞読みまし

たの。露亞西がまた負けて、

ほんとに日本は強いのだよ、お

父さんは、もー何人位斬った

かしらん。満州といふ所は、

これから何の位遠いのですか

妻大わたしきくなつたら行ゆきたいの、けれども妻わたしは女おんなだから……

「いやお隆たかさんは、實じつは男おとこであつたのだ。

「えッ、男おとこで、妻わたしが？」

「そー男おとこであつたんですよ。だからお父とうさんがよく言いつてた「お隆たかが男おとこであつたらば」って。ハハアそーですねえ、お隆たかさんが二歳たつとの時ときでしたろー、それはく寒さむい大雪きやく降ふりの日ひ、お母おつかさんがお隆たかさんを抱だいて、炬燵こたつに入はいつて、伯母おばさんと話はなをしてゐたのです、所ところが餘あまり火ひが強きつくて、お隆たかさんの罌きん丸たまが、トロリと熔とけて、火ひの中なかに落おちてしまつたんだ。さア大變たいへん、お父とうさんが大おこぼしてしまつたがもー仕方しかたがない、それからお隆たかさんは、女おんなになつたんです、だからお隆たかさんは、男おとこの兒このよーに元氣げんきがよい。ハ

ハハア

『おやそー。妾また男になつて戦争に出たいわ、兄さん！、こんど東京へ行つたら金の玉といふのを買ってきて頂戴！、妾それを腰にさげて男になるの。』

『けども、金玉は價值が高いから、銀玉を買つて来て上げよ。』

『兄さん！銀でなくとも、銅でもよいの』

『鐵砲玉なら一錢で五個。五個食べると飽きますね。ハハハ』

『鐵砲の丸なら、日本の兵隊さんに上げて、露亞西の兵隊を撃せたいわ。』

お隆さんには、今年七歳になる弟があります。名は盛と云つて矢張り元氣がよい、軍歌を誦ふのと、喇叭を吹くのが上手です。

或日盛坊は、雷太郎、武勇次郎などいふ、何れも七八歳の腕白輩を連れて来て

「姉さん！、一所に遊びに行こー。

『あア行こー。お國さんもお出なさい、いつものよーに、盛ちゃん

んと雷ちゃんが陸軍、武ちゃんと勇ちゃんが海軍、お國さんと

妾が赤十字社の看護婦になりましょー。よくって、そんなら直ぐ

行きましょー、盛ちゃん！喇叭と空氣銃を持ってお出なさい。

それから六人の小混成隊は、無邪氣聲を揃に、軍歌を謠ひながら

何處といふ的もなく、野原の方へと進みました、時に雷ちゃんと

いふ兒が、アッと起上り

「蛇が蛇が、大きな蛇が！、あア怒ったく

「叩けつ、ぶんなぐれつ、殺しちまはつ！」

「盛ちゃん、お止しつてば、虫けらなんか、弱者を虐めたつて、満らないやア、盛ちゃんは日本男子じゃないか、さア喇叭を吹いて行きましよーよ」

夫から、野中に行くと、種々な草が若葉を出し、堇菜、蒲公英、ニガナなど、所撰ばず咲き揃ふてゐる、小軍人共はこゝで列を亂して、草花の採集にかゝりました。で盛ちゃんは、犬の兒のよーに、獨りであちらこちらと駆け廻はり、野の真中にある小さな森まで行き、フト上を見あげた所が、餘り高くもない樹の枝に、一羽の鳩が眠つてゐたので大喜び、直ぐ空氣銃を向けよーと思つたが、自分勝手に撃つて外づれるといかぬから、ソツト還り来て

「姉さんく！大きな雀が、あゝあそこに眠ってゐるの、僕がぶつから、早く丸を込めて下さり

「そんなら妾が撃つ

よ、お前には駄目

よ、早く空気銃を

お貸しっ

「不可ない、僕がぶ

つのだ、僕が外づ

したら、姉さんぶ

つて！

「お前には、ぶたれ



やしない。 妾めかけがキ
 ット當あたて見みせるよ
 ！。
 いやだ、僕ぼくが見み付つ
 けたんだから、僕ぼく
 がぶつのだ
 『だから妾めかけがぶつた
 らお前まへに上あげるよ、
 解わからないね江、早はや
 くお貸かしってば



それでも弟あにの盛さかちゃんは、自じ分ぶんでぶとーとして、空て氣っ銃ぽうをやらん

から、姉はじれつたがり、無理に取ろーとした。弟は遣るまいと防いたが、姉は姉だけ、弟をつきのけて、空氣銃を奪ひとりました。弟は漸と往生して、豆の丸を姉に渡した。姉のお隆さんは、直ぐ森の下まで走り行き、ソツト樹の枝を見廻はすと、成程鳩が心よく眠てる、まアよくつてと、大きな樹の幹に身を隠し、靜に狙を定め、やがてポーンと打放しました。シメタ！鳩は兩翼をすくめて、ポタリと地上に落ちた、お隆さんは餘り巧くやつたので、夢のよーな思ひをした、鳩は猶更夢のよーでしたろー。

ポーンといふ音がしたので、後に残つて居つた小軍人共が、先を争つて來て見ると、お隆さんは既に鳩を取り上げてゐる

「姉さん萬歳！ 姉さん！僕におくれ、ねえー」

「あゝ上げるとも、大きな鳥だろー

そー言いつてゐるうちに、鳩ばとが少し動うごき出した。一体いつたい鳩ばとといふ鳥は、極たぎく臆おそ病びょうで、少すくし傷きずを受けても落おちる、況まして眠ねむつてゐた時ときであつたから、魂たまげ消けて一時いちじ氣絶きせつたのでしよー。そーして鳩ばとが蘇おぼ生かへつたので、盛さかんさんは嬉うれしがって躍おどり跳はね、小風呂こふうろ敷しに包つつんで、早はや々家うちへ歸かへりました。

「お母かあちゃん！露西亞ろしあの兵隊へいたい生擒せいぎんつて來きたア。日本にほん男子だんし豪たからいでしよー

「オヤまあ、これはく、鳩ばとをどこから貰もらつて來きたの、いゝことねえ

「いゝえ、お母かあさん、ほんとは妻つまがぶつて擒とらえたのですよ。日本にほん

女子豪らいでしよー。

「あゝ豪らい豪らい。日本男子も豪らければ、日本女子も豪らい!!!
「萬歳!!! 大日本帝國萬歳!!!

* * * * *

お隆さんと、盛さんは、鳩を飼って置いて、親切に世話をいたし

ました。鳩はよくなれて、毎日可愛らしい聲で、デデッポッポー、

デデッポッポー。ニホンカーツ、ニホンカーツと騒って居ります

とき。(おはり)

